

男性の自己概念と衣生活に関する意識との関連性

原田 妙子・間瀬 清美・小町谷寿子・石原 久代

Relation between the Self-concept and Wearing Habits in Men

Taeko HARADA, Kiyomi MASE, Hisako KOMACHIYA and Hisayo ISHIHARA

緒 言

介護保険の導入により、家庭での介護を考える必要性が大きくなっている現在、要介護者の衣服形態は、介護する側の利便性を優先されるために変えざるを得ない場合が多いのが実状である。要介護者にとって、急な衣生活の変化は、精神的に大きな負担になり、特に男性にとっては女性に比べ服種が限られているため、その機会も多いと思われる。

しかし、男性の衣生活に関する研究は少ないため、筆者らは、衣服着用実態や衣服に対する意見を調査し、年代によって下着類の着用状況やこだわりに差があることなどの結果を得た¹⁾。また、自分が要介護者になった場合の衣生活についての調査を行った結果、下着にこだわりを持っている人が多いこと、年代間で考え方に差があること、介護関連用品の使用についての意識に差があることなどを明らかにした²⁾。

そこで、これらの衣生活のこだわりや介護関連用品の使用についての意識は、個人の性格に大きく影響されていると考え、その関連性を把握することは、年老いてから要介護者・介護者ともに快適な生活を送るために、重要であるといえる。

ところで、自分について持っている意識やイメージを総称して「自己概念」と呼ぶ。自分をどのような人間と考えるか、自己概念の内容によって個人の行動は異なってくる。自己概念の内容と実際の行動が深く関連していることから、個人の自己概念を客観的に捉えようとする試みが多くなされている³⁾。

本報では、男性の自己概念を把握し、衣生活のこだわりや介護関連用品の使用についての意識との関連性を検討することによって、要介護者・介護者が快適な衣生活を送るための一助となることを目的とした。

方 法

調査時期は2000年11月で、被験者は中学生以上の男性とした。配布総数1618のうち有効回答総数は1165名であり、回収率は72.0%である。図1に被験者のプロフィールを示す。年齢構成は、10歳代204名、20歳代235名、30歳代148名、40歳代172名、50歳代285名、60歳以上121名であり、現在の勤務先の業種は、会社・工場が36%、中高生を含む学生が25%、サービス業8%、組合・

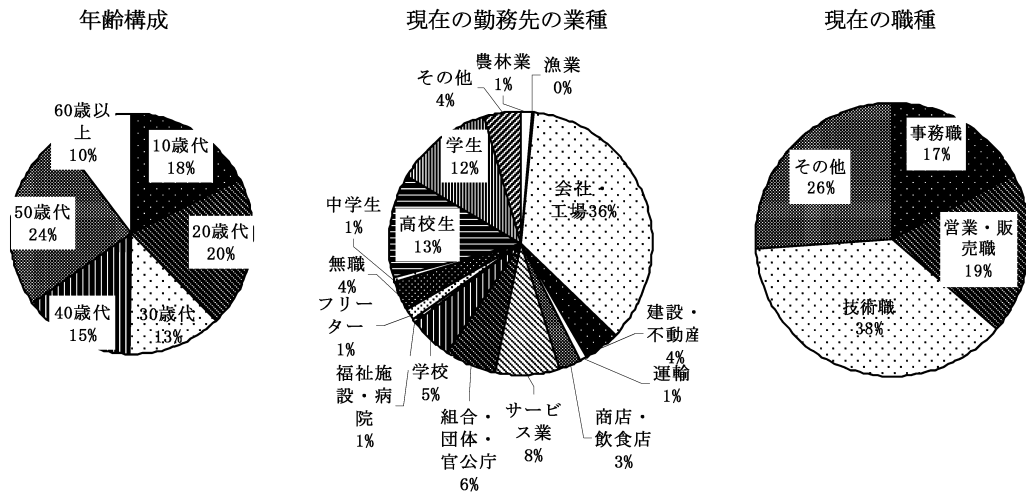


図1 被験者の属性

団体・官公庁6%であった。また、現在の職種については、技術職が38%と最も多く、次いで営業・販売職が19%、事務職が17%という順であった。

調査方法は、留め置き法によるアンケート調査である。

調査は、個人の自己概念を客観的に捉えた加藤・高木氏による性格の6つの側面を取上げた「自己概念測定尺度」を用いて行った³⁾。加藤・高木氏は青年期の人を対象者としていたが、本報では中学生から高齢者までをアンケートの対象とすることを考慮し、24項目の中から、個人が自分について考えている概念を測定する尺度12項目を選び、それらについて、5段階評価で回答を得た。取上げた項目は、自己概念の6つの側面からそれぞれ2項目ずつであり、『反社会性』を示す項目の中から「責任感がある—責任感がない」「怠け者である—働き者である」を、『意欲性・活動性』を示す項目からは、「頑固である—妥協的である」「活発な—おとなしい」を、『几帳面さ・清潔さ』から「几帳面である—ずぼらである」「清潔である—不潔である」を、『明朗性・友好性』から「陽気である—陰気である」「友好的である—敵対的である」を、『情緒性』から「興奮しやすい—冷静である」「悲観的である—楽観的である」を、『誠実さ』から「地味な—派手な」「すなおな—いじっぱりな」の計12項目である。それぞれの項目に対し、非常に・やや・どちらでもない・やや・非常にの5段階で評価してもらい、1~5点を与え数値化した。

得られた結果は、単純集計および同時期に得られた衣服の着用状況(所持枚数・衣服のフィット感の好み・下着の習慣など)および衣生活に関わると考えられる介護用品の使用(自分が要介護になったときを想定しての尿取りパットの使用など)についてのアンケート結果(参考文献1)2)参照)とのクロス集計を行い、それらの関連性について検討を行った。

結果および考察

1. 自己概念(反社会性、意欲性・活動性、几帳面さ・清潔さ、明朗性・友好性、情緒性、誠実さ) 自己概念の6つの側面を測定する2項目について、被験者毎に平均値を算出し、10歳代・20歳代・30歳代・40歳代・50歳代・60歳以上の年代別にまとめ、その出現の割合を図2に示した。

「責任感がない—責任感がある」「なまけものである—働き者である」で測定される『反社会

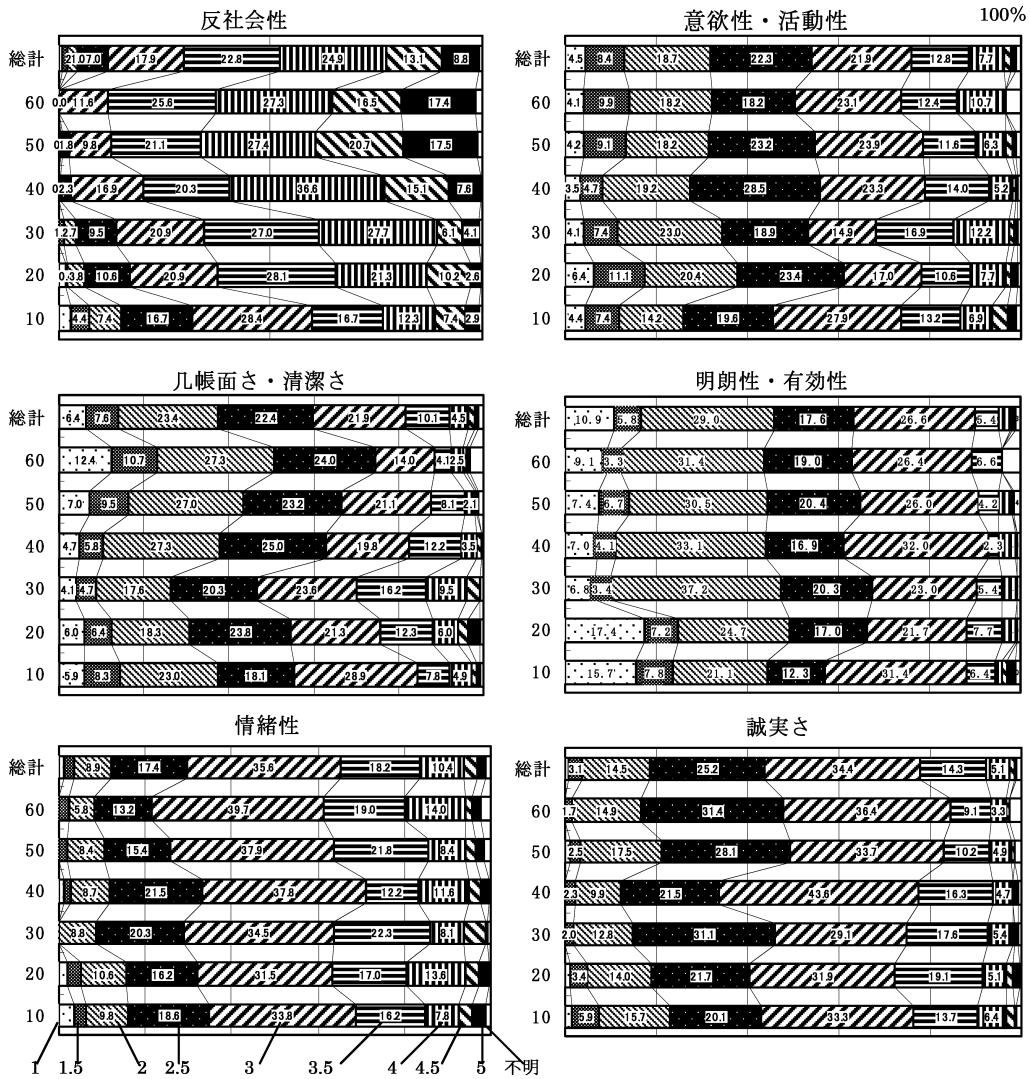


図2 自己概念 (年代別)

性』では、若い人ほどその傾向が強く見られ、10歳代ではおよそ1/3が2.5以下を示している。40歳代以上では、1から2の値を示す人がほとんど見られず、4以上と答えた人は50歳代が最も多く、およそ2/3見られる。次いで60歳以上、40歳代と続き、責任感があり働き者であると半数以上が答えており、年代間に差が見られる。

「頑固である—妥協的である」「活発な—おとなしい」で測定される『意欲性・活動性』では、20歳代でその傾向が見られ、10歳代は意外にも最も低くなっている。

「几帳面である—ずぼらである」「清潔である—不潔である」で測定される『几帳面さ・清潔さ』では、60歳以上、50歳代、40歳代の順でその傾向は強く、30歳代で最も低くなり、20歳代、10歳代と再び強くなっている。

『明朗性・友好性』では、どの年代とも半数に近い人が、陽気で友好的と答えている。特に

20歳代, 10歳代で1, 1.5と答えた人が, 他の年代と比べてかなり多い。

「興奮しやすい-冷静である」「悲観的である-楽観的である」の『情緒性』では, 全体に同じ様な傾向を示しているが, 60歳以上の人がどちらかといえば冷静で楽観的であるといえる。

「地味な-派手な」「すなおな-いじっぱりな」の『誠実さ』では, 10歳代と50歳代が地味で素直であると答えた人が多く, 40歳代がどちらでもないという結果であった。

2. 自己概念と下着のこだわり

介護が必要になった時, 自分が常に着用している服種を変えることが必要になり, 特に下着が問題となると考えられるため, 男性の衣服の着用状況および意識を調査した結果において, 個人のこだわりは服種によって差が見られ, 特に下着類で大きかった。そこで本報では, 下着類の中から, まず着用頻度の高い服種であった, 上衣ではランニングシャツと半袖シャツを, 下衣ではブリーフとトランクスに着目し, 要介護者になった時に今来ているタイプの服種を「変えたくない」「変えることに抵抗がない」「今着ていない」「着たくない」などの衣服へのこだわりと, 自己概念との関連を見ることにした。

ここで自己概念を, 得点の1, 1.5, 2の人をその傾向が強いグループ, 2.5, 3, 3.5を普通のグループ, 4, 4.5, 5を弱いグループに分け, それらのグループ毎に下着に関するこだわりについて見た。

その結果, 『反社会性』以外の性格の側面では, 全体を総合してみると性格による差は認められなかった。

差の見られた『反社会性』では, その傾向が弱い人ほどランニングシャツは着たことがない人が多く, 逆に強い人ほどブリーフは身に着けたくなく, 半袖シャツやトランクスは変えたくないと答えている。さらに強い人ではトランクスを着たことがない, 身につけたくないと言う人は見られなかった。これは, 若い人ほど反社会性が強いという年代による差が反映されているものと思われる。

そこで, 自己概念の影響は, 全体を総合的に見るよりも年代による影響が大きいと考え, 6つの側面について年代別に下着のこだわりとの関係をみることにした。取り上げた服種は, 介護を考えた時に特に下衣の下着が大きく関係してくると考え, ブリーフとトランクスとし, その結果を図3・4に示す。

『反社会性』との関連をみると, ブリーフは, 10歳代, 40歳代, 50歳代で, 反社会性が弱い人ほど, 着ない人あるいは着たくない人が多く, 20歳代, 30歳代, 60歳以上では傾向が強い人が着ない, 着たくないと答えている。トランクスは, 若い人に変えたくない人が多く, 10歳代で反社会性の弱い人が変えたくないと答えているが, 40歳代, 50歳代になると, 強い人ほど変えたくない人が増え, 60歳以上は逆に着ない, 着たくない人が増えている。

『意欲性』を示す頑固さ, 活発さはあまり関係していなかったが, 60歳以上で強い傾向にある人の方がブリーフを着ない, 着たくないとしている点は, 介護用品を使用する上で問題となる部分だと考えられる。

『几帳面さ・清潔さ』を見ると, ブリーフについては性格よりも年齢間の差が大きい, トランクスでは20歳代以上で, ずぼらで不潔な人ほど変えたくないというこだわりが強く見られる。

『明朗性・友好性』では下着のこだわりには差は認められなかった。

『情緒性』では, どの年代も冷静で楽観的な人ほど, ブリーフは変えることに抵抗がない人が多く, トランクスは普通の人変えることに抵抗もなく変えてもいいと答えている。

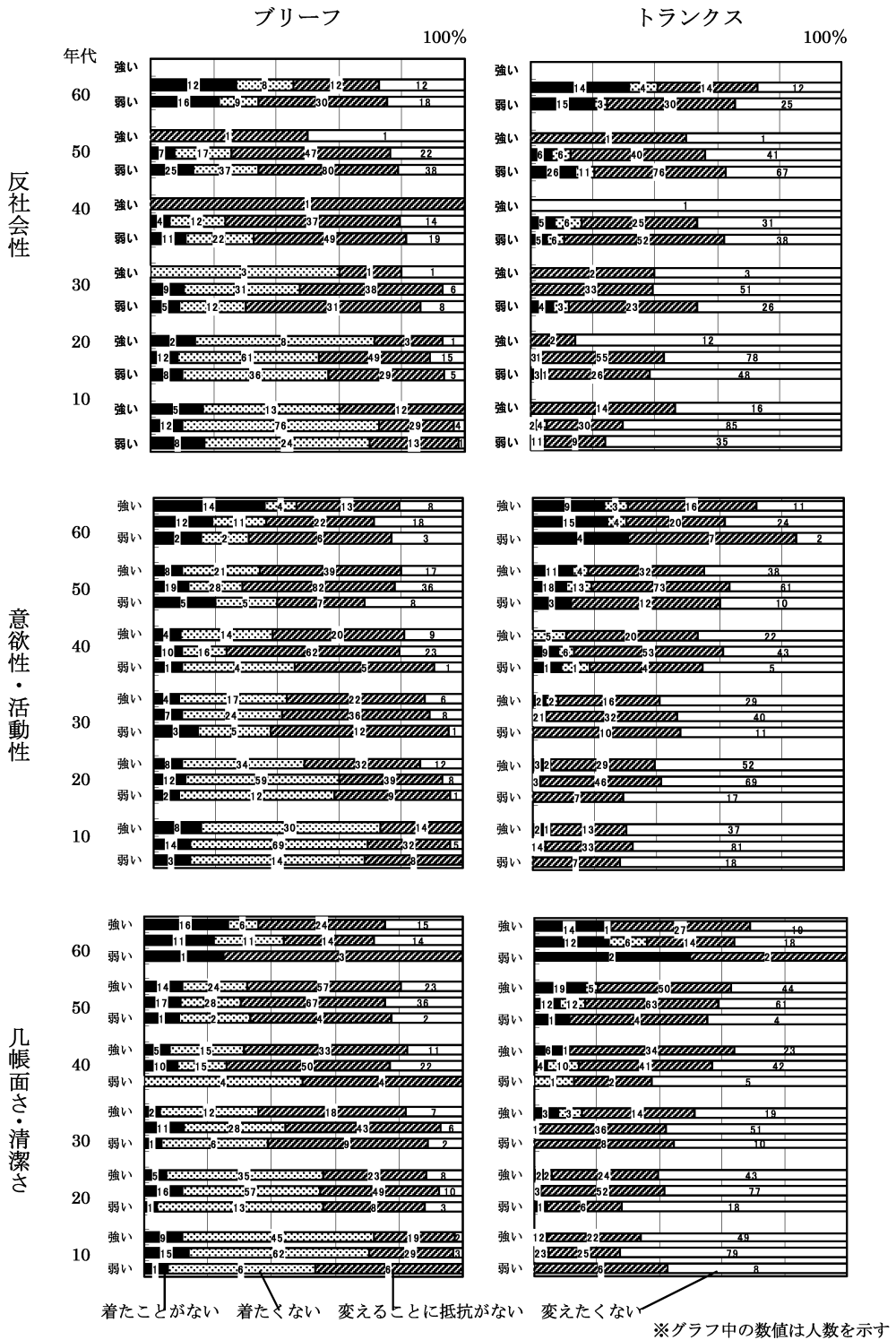


図3 自己概念（反社会性，意欲性・活動性，几帳面さ・清潔さ）と下着のこだわり

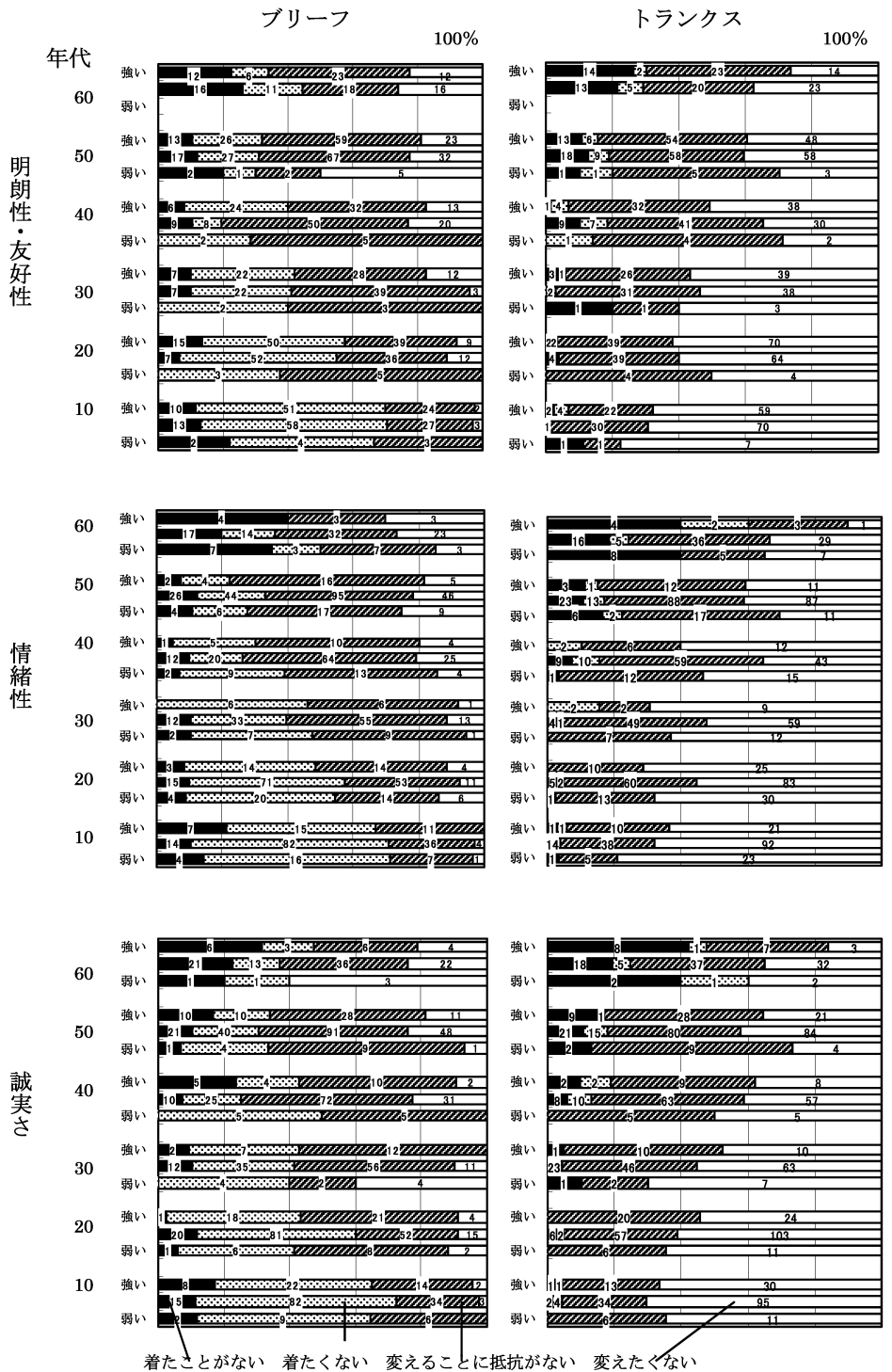


図4 自己概念 (明朗性・友好性, 情緒性, 誠実さ) と下着のこだわり

『誠実さ』において、トランクスについては、20歳代以上で派手な人ほど、変えたくないとしている。

ブリーフを着たくないというこだわりは、10・20歳代で、冷静で楽観的な人にやや強く見られるが、60歳以上では、情緒性が高い人の方が着ない、着たくない人が多くなっている。逆に、50歳代では、変えたくないという人は、冷静で楽観的な人であった。

またトランクスは、10歳代で冷静で楽観的な人が、また20歳代以上でずぼらで不潔な人や派手な人ほど変えたくないと答えているが、20～40歳代ではどちらでもない人はこだわりがやや少なくなっている。

3. 自分で歩けるが小便を漏らしてしまうことがあるようになった時の尿取りパットの使用と自己概念

高齢社会になった現在の衣生活を考えるには、介護用品の使用が重要な問題であり、衣服の着用に合わせて考えなくてはならなくなっている。そこで、自分が介護されるようになった時を想定しての尿取りパットなど介護用品の使用についてみると、20歳代、30歳代が外出時に積極的に使用する人が多く、使用したくない人が少ない。さらに、60歳代と10歳代が積極的には使用したくない人が多く、特に10歳代では外出時には仕方なくも使用したくない傾向にあるという結果を得て、すでに報告している²⁾。そこで、これらの意識は年代に加え、自己概念と関わりがあるのではないかと考えた。本報では、まず要介護の最初に直面する自分で歩けるが小便を漏らしてしまうことがあるようになった時の尿取りパットの使用について、年代別・自己概念の傾向別に分けて図5に示す。

『反社会性』では、10歳代と60歳以上で社会性のある人ほど使用したくない人が多く、20・30・40歳代では、普通の人の人が使用したくないと答えている。20歳代では、社会性の強い人ほど外出時の使用が多く見られる。

『意欲性・活動性』では、外出時の使用は10歳代・20歳代と60歳代以上で強い傾向にある人に多く、更に60歳以上では強い人が使用したくない割合も少なくなっている。

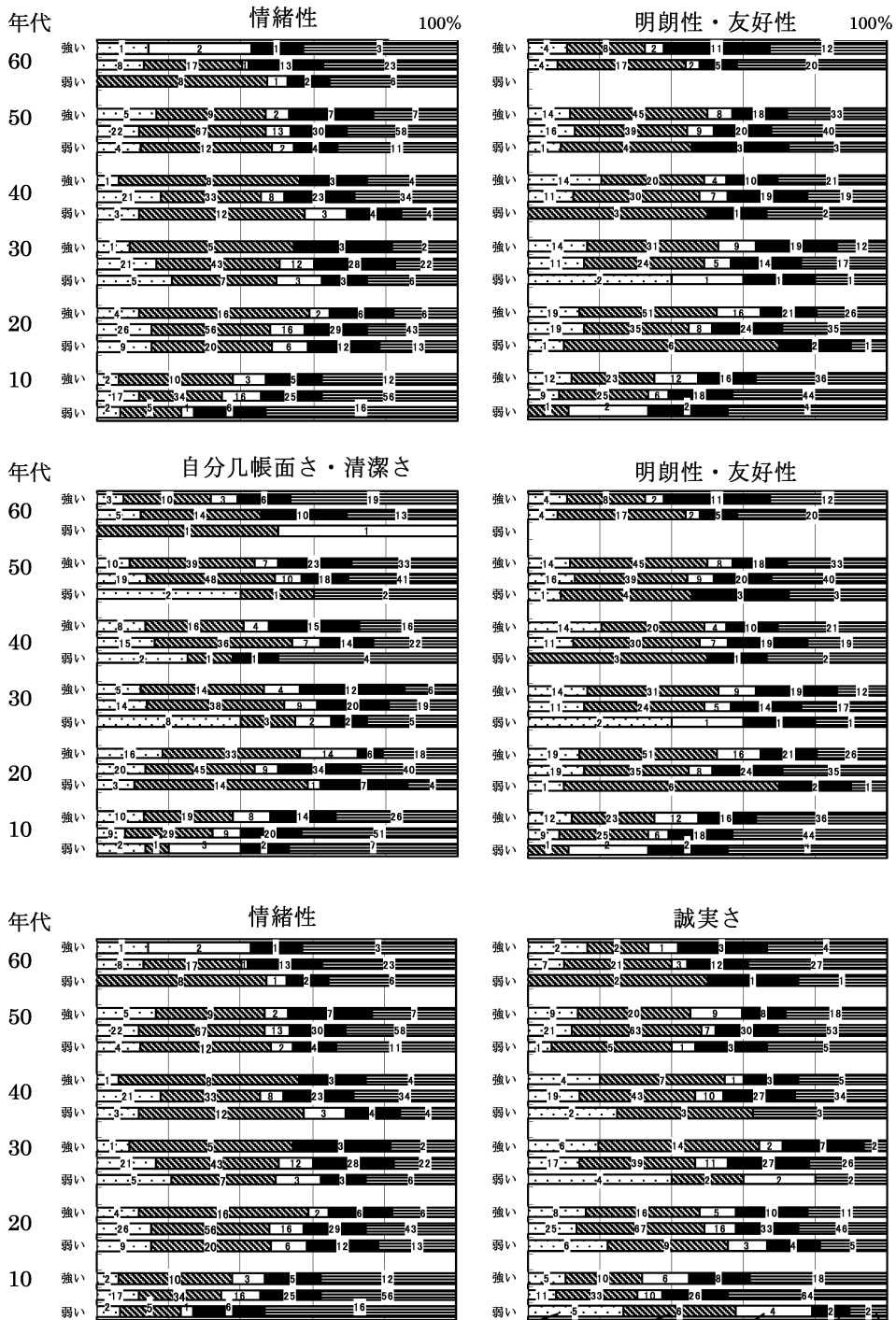
『几帳面さ・清潔さ』では、10歳代でその傾向が強いほど積極的な使用が見られる。また、30歳代・50歳代では弱い人ほど積極的には使用しないが、強い人ほど使用したくない人は少なくなる。60歳以上は10歳代とは逆に弱い人のほうが外出時には積極的に使用したいと答えている。

『明朗性・友好性』では、全体的に明るい人が使用する傾向にあり、10歳代でその傾向が強く見られる。60歳以上でも、明るく友好的な人の方が積極的には使用しなくとも否定的な人は少ないという結果である。

『情緒性』では、冷静で楽観的な人の方が使用する傾向にあるが、60歳以上で逆の結果になっている。

『誠実さ』では、10歳代、20歳代と60歳代が弱い人が使用に積極的であるが、40代以上になると誠実な人では介護や尿漏れがやや現実味を帯びてくるのか、使用すると答えた人が多くなっている。

自分が介護されるようになった時を想定しての介護用品の使用については、年代毎の性格に係わる傾向は、10歳代と60歳以上が比較的似ており、30歳代でこだわりなどが変化し、40・50歳代で確立していく傾向にあると見られる。また、自己概念で示される性格によって、積極的に使用するあるいは使用したくないの程度に差が認められた。年老いてから、要介護者・介護



※グラフ中の数値は人数を示す 外出時に積極的に使用 外出時仕方なく使用 家の中で仕方なく使用 家の中で積極的に使用 使用しない

図5 自分で歩けるが小便を漏らしてしまうことがあるようになった時の尿取りパッドの使用と自己概念

者ともに快適な生活を送るためには、自己概念を把握しそれに応じた対応を取っていく必要があることが明らかになった。

要 約

要介護者・介護者が快適な生活を送るための一助となることを目的とし、男性の自己概念を把握し、衣生活のこだわりや介護関連用品の使用についての意識との関連性を検討した結果、自己概念の『反社会性』では、若い人ほど傾向が強く、40歳代以上は責任感があり働き者であると半数以上が答えており、年代間に差が見られた。『几帳面さ・清潔さ』で、40歳代以上は傾向が強く、30歳代で最も低くなっていた。『明朗性・友好性』では、どの年代とも半数に近い人が陽気で友好的と答えていた。衣服のこだわりとの関連は、『反社会性』が強い人ほどブリーフは身に着けたくなく半袖シャツやトランクスは変えたくない傾向にあり、トランクスを着たことがない、身につけたくない人はいなかった。自己概念で示される性格によって、尿取りパットを積極的に使用するあるいは使用したくない度合いに差が認められた。さらに年代別には10歳代と60歳以上が似ており、30歳代でこだわりなどが変化し40・50歳代で確立していく傾向にあった。

今後さらに検討を重ね、各自の性格を考え合わせ、介護する側もされる側も負担の少ない衣生活を送るための参考にしたいと思っている。

調査に御理解とご協力いただいた皆様に深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 間瀬清美, 原田妙子, 小町谷寿子, 石原久代: 男性の衣服着用の現状, 日本家政学会誌, Vol.54 No.3, 219-228 (2003)
- 2) 石原久代, 間瀬清美, 原田妙子, 小町谷寿子: 長高齢社会に向けた男性の着用衣服に関する意識, 繊維製品消費科学, Vol.45 No.12, 161-169 (2004)
- 3) 堀洋道他: 心理尺度ファイル, 18・22-23, 稲垣出版 (1994)

